月　刊

Mélange

Vol.147

2019.10.27

詩と評論

月刊「Mélange」

Vol.1452019.10.27

「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」147 号　目次

詩

そこでぼくは ……田村周平　03
残土／刑 ……中嶋康雄　04
やさしいへびから……秦 ひろこ　05
多すぎる新道 ……野口 裕　06
体温Ｈ・Ｅ氏に　……法橋太郎　10
らんだむ ……大橋愛由等　11
バリケード　……高木敏克　12
導体……高谷和幸　12
ジャージの軍団 ……黒田ナオ　14
彼方へ、彼方に ……大西隆志　15

第 22 回ロルカ詩祭朗読作品〈2019.08.17〉

船出／八月残照……安西佐有理　07
無残な八月……大橋愛由等　08

お知らせ

「2019.11.04 ことばとフォークソング」……書肆風羅堂・図書出版まろうど社　15

連載

神戸詞（うた）あしび 136「 華厳―存在解体のあとの〈理〉のありかを問う」……大橋愛由等　16

編集部だより★67／天皇の代替儀式が続いている。「即位礼正殿の儀」が 10 月 22 日（火）に行われ、今年のみ休日となった。来賓として世界各国から 1999 人が参加。その中には、王族の人たちも含まれている。現在、世界の中で王室が残っているは 26 カ国。そのなかで注目したのはスペイン国王・フェリペ 6 世である。この国の王室は日本に比べて柔軟で国民に開かれているといえよう。「菊のカーテン」といったものはおそらく存在しないだろう。国王が平服でふらりとレストランを訪れ会食するというニュースにスペイン国民は驚くことはない。というのは、スペインは何度か政変があり、王政が途絶えた時期もあったため、スペイン王室はスペイン国民の人気と支持を得るために、国民に寄り添う姿勢を演出しつづけざるを得ないのである。いまのところフェリペ 6 世は国民に支持されているようだが、2014 年に行われた国民投票では、人気のなかった父王ファン・カルロス（アフリカで象射ちに興じるなどその品行が国民から不興をかっていた）からフィリッペ 6 世に譲位されたとき（2014 年）、新国王への支持が 49%であったのに対して、共和制支持が 36%と拮抗していたことも忘れてはならないだろう。今年はスペイン内戦（2016-2019）が終結してちょうど 80 年を迎える。内戦は終結したあとも、フランコによる敵対する共和派狩りはながくひつこく徹底したものだった。やはり内戦というのは国民を真っ二つに引き裂いてしまうのだ。スペイン人の少なからぬ人たちが国王はスペインにおける国民統合の象徴とみなしていないことも事実なのである。／今月の「Mélange」例会第一部「読書会」の話者は神尾和寿氏。テーマは〈「詩人とは誰のことかーハイデッガー「四方界」（Geviert）再考ー」〉です。（大橋愛由等記）

◆そこでぼくは

田村周平

桜が散る
つづぢが咲く
夏の夜空を見上げ
雪の山を仰ぐ
自然はいつも心を動かす
文字をしてみるとまた

感動の共有
それが芸術
人は共有するために
文字を作った
自然を文学に還元し
文字を自然に

そこで僕は
詩を書きはじめる
せめてぼくの中の
もう一人のぼくと
共有するために

（この作品は2019.09.30「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています）

◆残土

中嶋康雄

工事は済んだ
溝はセメントで埋められた
飽和が残土を覆った
ミミズが水ぶくれして
死ぬようになった
箒で集めて毎朝捨てた
捨てた場所に雀が来て
死んだミミズを啄んだ
新聞配達をする男が
巨大なミミズになった
ブクブクと膨れながら
毎朝配達した
新聞に掲載されるニュースは
有り余るほど嘘が混ざっていた
嘘が飛び散り
読む目玉にこびりついた
雀が甘い嘘だけ啄んだ
辛い嘘が腐敗しながら積もった
腐敗したらミミズになった
ミミズはますます多く死ぬようになった
目の前でご飯がミミズになった
目の前でミミズになった妻が
自家用車に乗りシートベルトを締めた
シートベルトが腹に食い込み
妻は二つに切れた
頭側の妻は優しい
尻側の妻はおかしい
妻は至る所で切れ
妻はどんどん増えていった
新聞配達のミミズと妻たちが
輪になってスキップした
和気あいあい
朝のニュースは
嘘と恥

◆刑

中嶋康雄

買ったばかり
白い白いアイスクリームにとまる
黄色い蚊
殺す
蚊は卵を産んで
晩夏
夜は寝苦しい
睡眠不足の苛々のまま
出掛けなければならない
薄汚い朝
やっと着いたのに
「もう、いらない」
そんな毎日の毎日
電車がそれでも走っている
蚊が電車に乗っている
順番がやってくる
隣の人が蚊に必死に謝っている
次はここにも
池の水は汚い
ほんとうに汚い
黄色いボウフラがランドセルを
わざわざ背負っている
ボウフラは勉強なんかしなくても
じゅうぶん賢い
よろこびが続いている
ここにずっと居なさい
だまされている
食べる
腹の中で孵る
胃や腸は栄養でいっぱいだ
しかも温い
すぐに成虫になり
口の中から出てくる
溜息の度に出てくる
蚊はそういうウィルスを出して
都合のよいときに溜息をさせることができる
刑は近い
蚊に
よろこんで
もらえない
体

◆やさしいへびから

秦 ひろこ

朝毎に箱を開けるとキミたちがいる
キミたちはからだを巻いて重なり合って眠っている
巻いたからだの真ん中に勾玉のかたちの頭
横向きの顔に水平に閉じた目
二匹ずつ互いを抱いて二つ巴

かわいたすがたのキミたちを
そっとほどいて今日は三匹取り出す
まだ眠り続けるキミらを目覚めさせるには
頭と反対側
細く尖る尾の先に火をあたえること

火を得た尾の先に朱い目がともる
かわいたからだのキミたちを片手で持ち上げる
はじめ炎は小さく
しだいに大きく高く燃え上がり
透んだ炎のたてがみとなる

穏やかに目を閉じる頭の反対側
尾の先に現れたもう一つの顔
朱い目と燃えるたてがみの

猛々しい真逆のすがた
キミたちは二つの頭を持つ双頭の竜

燃えるたてがみの猛々した朱い目は
一日を生きるわたしの気合を問う
まだ涼しい夏の朝
鳴きはじめたクマゼミの
わたしのネジを巻く声が聞こえていて

キミたちを
かわいたやさしいへびだと思っていた
なまなましたものを忌避してきた自分にとって
キミらの種族に近づける取っ掛かり
そう思って満足だった

キミたちはいま
やさしいへび以上のもの
うちがわでゆっくり熟してきた竜という存在
甲骨文字の時代に現れていた

わたしのもっとも身近のあたりにすがたを見せる

キミらの朱い目はいまもなにか言いたげ
どうやらまだ進化していくつもりらしい

◆多すぎる新道

野口 裕

過去
おそらくは高木の鬱蒼と茂り
樹冠が光を奪い取る中で
低木は零れ来る光をすすり
余り物としての種子を育て
鳥に食してもらおうとしていた

今
土に道が走り
道はかつての海の吐瀉物に覆われ
ひょろひょろと道筋を示す高木の
みすぼらしい樹冠をあざ笑うかのように
低木は存分に光を吸い葉を幾重にも重ね
排気ガスもまた食らうべしと
枝を絡めあう

シャリンバイの実は一房に十ほど
一叢にいくつの房があるのか知らず
灌木は十字路から次の十字路へと
うねうねと続く

「いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん」はさておき
知ること、身に知ることと
シャリンバイをひとつ摘んだ
固い
鳥が啄むのはまだ先
噛んでみるとほんのり甘い

鳥に意地悪するように
実をすべて刈り
薄く貼り付く果肉をこそげ取れば
ジャムくらいはできるかもしれない
だがまあやめておこう

この辺で鴉の一声が欲しいところだが
あいつ等も寝ぐらに戻った頃合い
秋の日暮れは早い

◆船出

ver.20190817

安西佐有理

ことばを石の上に置く
ことばに水を灌ぐ
ことばを眺めている
（遠い心音モニターの記憶のように）

ことばは丸い波音に洗われる船着き場を思い出した
ことばにはアオサやヒザラガイのように呟く声もなかったので
鍵盤を離れた「乙女の祈り」の流れ着く国境で叫ぶこともできず
ことばはひとりだったが
ことばから時は奪えないはずだった
ことばは、やがて、切り取られた海と空を〈家〉と名付けて
臨終の舌をつきだし、夏の色彩を舐め取った

ことばを頑丈なガラスのトランクに詰める
（白木の小舟には乗せず）
ことばを遅れてきたツチガエルの鳴く夜に放つ
（あざやかな朝の喧騒には丁重な笑みで応じて）
ことばが微かにひかりはじめる
（非常の日をまた一日つないで）

◆Otro dia
veremos la resurreccion de las mariposas disecadas
いつかは
ぼくらは蝶の標本の蘇生に立ち会うことになる
（Federico Garcia Lorca, ?Ciudad sin sueno (Nocturno del Brooklyn Bridge)?
フェデリコ・ガルシア・ロルカ「眠りのない都会（ブルックリン・ブリッジ夜想曲）」）

（編集部注／本作品は第22回ロルカ詩祭〈2019.08.17〉で朗読されたものです）

◆八月 残照

安西佐有理

熱の過剰で
あるいは熱の欠落で
小さく緑の葉をまるめた
心もとない樹が
水のにおいに（気付かぬまま）
歩み寄るのか
見失った影をひろいあげ
足元にぬいつけて
ふたりづれ
トンネルぬけて
円の空　まぶしい
うわの空
内海に白く光る
里山に白くそよぐ
記憶だったかもしれない
横隔膜の跡
なぞって
島であった塊を
もういちど
放流する
岸辺が
少しずつ
歩いてゆく

◆無残な八月

大橋愛由等

しなだれて
いるわけでも
しじまに
おののいている
わけでも
ないのに
石の家から
離れられず
石たちの
黙の気配が
ずしり
はだかり
ぼくを
周回する
風を
あらあら支配して
青と青と青を
もっぱら
うがつ
穿孔器が
うなりだす
午後二時三〇分と
なにも取るなと
厳命されている
潜水夫たちが
港に
帰ってくる
午後五時五分前
のあいだには
分節化されない
凪の海から
石の家の
天井裏に
移りすんだ
背徳の
魚たちが
ぼくに
語りかけようと
していることにも
日陰を自在に動かす
双蝶たちの
吐息を
測るひとときでさえも
夏の残酷に
包摂されてしまい
鳥たちの
羽ばたきの
波動には
いかなる
還元
あきらめ
秘匿
さえも
三拍子のリズム
に合わせ
歌い踊る
ことと
石の家で
ひりひりと
動かぬ
叙情に
寂寞していても
石のベッド
の堅き口の
病者に
むかって
四つ五つ六つの
俗羅甸語をつらねた
詩句を
並べてみても
石たちは
きまって
「まだだ」
と群唱して
この地の
背山たちもまた
切断され

囲われた
があでんの
群れ
であること
によって
生まれる
醒めた熱が
ぼくの
昼ざれの
震えに
共苦
しながら
青の孔が
きっちり
24であることを
なぞることは
円形に
構築され
恣意
執念
反復
に満ちた
石家に
棲みながら
そこを
抜け出るための
ひとつの
耐え難き
表象として
受け止め
悲哭するのを
たそがれまで
耐えようかと
石家の窓から
眺める
浅黄の線が
するする
港に
つながってい
さまが
なにかに
近似している
かのようだが
思い出せない
午後五時三〇分に
帰り着く
最終船には
石を夜に数える
花をうなじに
風を切り刻む
月陰から逃れ
浅黄を食べる
にまじって
蝶に追われた
ナランハの樹
フェデリコが
帰っては
こないだろうか
と思念しつつ
その波止場に
向かうために
この石の家の
ファサードの
ありかを
ぼくが
病者に
宣告して
見つけ出し
いくつかの
優しく
独語的で
寛容なき
八月を
フェデリコと
分かち合わなければ
ならないのだ
フェデリコよ
ぼくたちは
また今年も
無残な
八月に
佇っているのだ
フェデリコよ

〈本作品は第22回ロルカ詩祭〈2019.08.17〉で朗読されたものです〉

◆体温

H・E氏に

法橋太郎

ドアを開いてジョージは旧い厚手のジャケットを着て立っている。まあどうぞとおれを招き入れる。おまえは紅茶の袋の底を叩き粉になった紅茶を陶器の白いポットに入れ、湯を注ぐ。おれにはもう夢なんて残ってないんだよと言っておまえは紅茶を淹れる。ふたつのマグカップに淹れられた紅茶をまえにしておれは言葉に詰まる。

おおジョージ、しかしおまえが淹れてくれた紅茶はここにある。夢が紅茶の粉のように砕け果てたとしてもおれに淹れてくれた紅茶は本物だ。マグカップのなかの薄い紅茶に粉となった夢が渦巻く。ジョージ。おれはおまえの手の甲に掌を置いて思う。おまえの夢が亡くなったとしてもおまえのいのちはここにあるんじゃないかと。

しかしね、とおまえが言う。おれは寒いんだ。この夏になっても凍えることがあるんだと。嘘と汚辱に抗って生きてきたおまえの腕が震えを堪えるようにしてマグカップをとる。喪った祖国。祖国にいながらの遠い祖国。おまえはそのために今でも闘っているんじゃないのか。いのちを震わせながらそうやってまずみずからと闘っているんじゃないのか。

それをおまえに納得させるどんな言葉もおれにはない。おれが何を言ったとしてもおまえは頑固に否と言うだろう。お元気でとおれがおまえに言っておまえの身体を渾身のちからで抱きしめる。おまえは嬉しそうにすこし笑ってまたなと嗄れた声で別れを告げる。おおジョージ。おまえはまだ闘っているはずだ。斃れるまでいのちのかぎり立ちつづけるんだジョージ。おまえがそうであるようにおれはおまえの体温を忘れない。

◆らんだむ

大橋愛由等

寄りかかることを拒む隣人に三角を分節せよ
（〈四つ折りを忘却した鳥が光のなかで最小化される〉こころを世界海の深さに合わせてコロコロ転がせているうちに純度が忍耐を忘れるようになり午前三時の語りには衒学的嘘がまじらなくなっていき「それもこれもどれも語ったはずよ」と繰り返すあなたの声の透明度が六年前にギリヤーク語の単語をふたつみっつ発音していた刻にくらべて風景に溶解していくさまが見て取れるよと言いたかったのに腕時計が補陀落渡海がはじまりそうだと伝えてきたのでジャコメッティ風なお気に入りの椅子からゆるゆると離れて三角が笑いつづける部屋に向かおうとしていたんだ。〈愛は定型詩のようにくねくねしたいとすれば〉語りかけた礎石はぼくとあなたの境界が不分明だという理由で昨日と今日の換喩という換喩をグリーンアスパラガスが入ったパックの配列に似せて並置して「あとは石の彫刻家がどう切断するか穿つかによって換喩は横線を引き出すだろう」などと言うものだら赤い雲が背山を山越えしようとしてなんども失敗しているさまに泣いてばかりいたあなたの黒子が換喩の自分語りに反応して日々大きさが変化していくことを知らないわけではなかったのだがここは寂寥のままに過ごすのがいいんだとぼくはイデアに関する思考をすこしだけ休止することに決めた。〈昨夜しゃべりすぎた三角は風を捕まえる誘蛾灯の設置を忘れてはいなかった〉オノマトペを多用するとあなたも礎石も顔をしかめることはくねくねが風景を描く色鉛筆の減り具合で推察できていたのだが月の速度がどうも不調のように思えて仕方なくなんども曇天を眺めているぼくを見つけてあなたはこう言った「だから迷宮に入る鍵がみつからないのよ」。

◆バリケード

高木敏克

チベットの禿鷲が大気流に乗ってきた秋の朝
鳥の影は青空をくりぬいて鮮明な闇が透ける
砦の上では、風葬の青い旗がはためいている

空白の五十年と言えば簡単だが、われらが砦
東大闘争から五十年消えたシュプレヒコール
全国大学闘争は太平洋戦争のように玉砕せよ

取りもどせない時間が死となってやってくる
取りもどせない空間が闇となってやってくる
はたして時間は空間に置き換えられるのか？

しかしハゲワシにとっては時間も空間の一部
時間はすべて空間に置き換えられて鳥は見る
死体は闇の中にあるので空からはよく見える

決して報じられることのないウチゲバの死者
時間という苦痛から解き放たれて立ちのぼる
紫の糞の匂いとなって大空に溶けてゆく狼煙

砦の上では、風葬の青い旗がはためいている
バリケードの中には、語られない死者がいる
禿鷲が見たのは、青い空の切れ端となった死

◆導体

高谷和幸

「天蓋に刻まれた星辰を見失い、わたしたちはどこへ向かうのか」。朝の電車の中で読書するあの人は、窓際で椅子に座り読書する人という没我性とマイナスの闘争性の二元的なイメージとして磁力を湛えた黒い沼の前にあった。その人に文字をかざしてみる。赤いシグナルが点滅して、その人の横顔を照らしている。「折り畳まれたものが忘れられる」。硬化したビニールの被膜に覆われた導体は列車を神経樹のように支配していた。わたしたちはその導体に満たされた磁界の海に捉えられ、磁気を帯びる。天体＝導体は黒い沼のように動かないでいる。静止しているようだがそもそもそれ自体は時間がないのでどこからどこへという展開もないだろう。指力線が頭上から、放物線をえがくようにほのかに温かいものが巡廻していた。その人は燃え尽き崩れ落ちる。黒を薄めてできる赤へ、白の度数を上げた黄色へ、磁界が欲望するままに。

（この作品は2019.09.30「カフェ・エクリ」合評会で発表されたものを本誌に転載しています）

◆ジャージの軍団

黒田ナオ

いーちにぃさーんしぃ
ごーろーくひーちはーち

放課後の運動部員たちのかけ声は
やる気なく、間のびして
呪文みたいにからみつき
ゆっくりと商店街まで流れてきたら
虹色のアーケードをくぐり抜けて
青白く光る鯖の切り身が
ぷかりぷかりと浮かび上がる

夕飯を作るはずの私も
もうすっかり人間ではいられなくて
歩けない、這いまわる
ザルから溢れる大量の千切りキャベツを
眩しそうに眺めながら
深い鍋の底で牛蒡や人参、蒟蒻どもが
ぐつぐつと呻めき始める
午後四時二十分

にぃにぃさーんしぃ
ごーろーくひーちはーち

踊るジャージの軍団は
今日もぬるい欠伸を噛み殺しながら
前屈後屈、腰から上を大きく回して
長く伸びきった放課後の校庭に
いつか遠い宇宙の果てから
謎のＵＦＯがやって来る日を
密かに待ち続けている

◆彼方へ、彼方に

大西隆志

土塁へと歩みよる
静かな城下の街へ
雨は降り続くのか
丘の上の美術館に
突然にあらわれた
夜の花火は先の先
諍いは些細なこと
平穏へ差し込まれ
しめされた承諾に
異を唱えることの
刻限へと傾きとは

死の調べも感じ得
徹底した抵抗にも
古い書物のように
閉じられているか
取り巻くのは幻影
木に彫られた形に
ひとつだけの主は
閉じこもったのか
篠笛の長くつづく
葬礼の情景を背に
騒がしい鐘が鳴る

焔の争いにならず
痩せていく身体の
現象と共にすすみ
小さな点に留まり
ゆっくりと迎える
失われるのは誇り
波の音が届くのか
隠れ家へと移った
毒杯に死を受けて
ひきちぎる臓腑は
葉脈に去っている

書肆風羅堂／まろうど社 EVENT・in スペイン料理店カルメン

スペインの国民的詩人といわれるフェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898-1936)の生誕百年にあたる1998年に、神戸のスペイン料理店カルメンで始めた「ロルカ詩祭」。ロルカは、スペイン内戦が始まってすぐに、故郷グラナダで、敵対するファシスト達によって銃殺されました。このロルカ詩祭のメンバーに影響を与えたのが詩人の故・君本昌久さんでした。シュールレアリズム系の詩人であり、神戸市民同友会、神戸空襲を記憶する会などの多彩な市民活動を行い、時代の風を全身で浴びていた詩人で、言葉を軽やかに歌い社会の動きに共鳴し60年代にフォークソングに惹かれたのは必然でした。神戸の地で詩人が最初にフォークミュージックを取り上げたシンポジウムまで開きました。「今、ここ」であえてフォークの言葉の親和性を拡げ、ロルカ詩祭からつながるようにフォークリバイバルライブを企画しました。書肆風羅堂の大西とまろうど社の大橋によるコンサートです。日本で最初のスペイン料理店カルメンで美味しい料理とワインで、ことばの力強さや優しさに触れていただければと願っています。

ことばとフォークソング in スペイン料理店「カルメン」

2019年11月4日(月・祝)14時～17時

参加 3,000円（ワンドリンク・ワンフーズ付き）

・OKランブラーズ・神田修作・カニコーセン

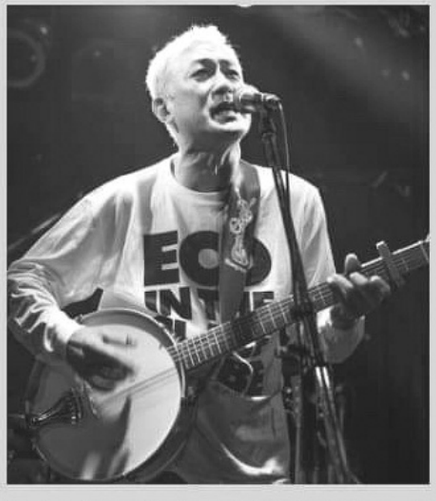
・たけだあすか・弥太郎・…and more

ゲスト・中川五郎

歌/ギター

1949年、大阪生まれ。60年代半ばからアメリカのフォーク・ソングの影響を受けて、曲を作ったり歌ったりし始め、68年に「受験生のブルース」や「主婦のブルース」を発表。70年代に入ってからは音楽に関する文章や歌詞の対訳などが活動の中心に。90年代に入ってからは小説の執筆やチャールズ・ブコウスキーの小説などさまざまな翻訳も行っている。

アルバムに『終わり・始まる』(1969年、URC)、『25年目のおっぱい』(1976年、フィリップス)、『また恋をしてしまったぼく』(1978年、ベルウッド）など。2004年の春には26年ぶりのアルバム『ぼくが死んでこの世を去る日』をリリースし、最新アルバムは2006年秋の『そしてぼくはひとりになる』(シールズ・レコード)。



参加 3,000円(1ドリンク・1フード付き)

連絡先：090-3714-9387(書肆風羅堂/大西)

スペイン料理店カルメン 神戸市中央区北長狭通1-7-1 TEL：078-331-2228

JR三ノ宮駅・阪急三ノ宮駅より徒歩北すぐ。

神戸詞（うた）あしび

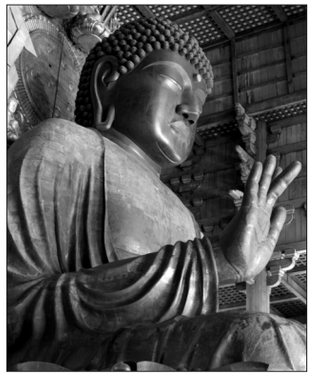
136-2019.10.27 大橋愛由等

明恵のことを前回書いた。今月は華厳思想のことに言及してみよう。

華厳思想に本格的に出会ったのは学生時代。『仏教の思想』というタイトルの13巻シリーズが角川書店から刊行され、それを一冊ずつ読みすすめているうちに、感情を激しくゆさぶられたのが華厳に関する書物（『無限の世界観〈華厳〉』1973）だった。

その感情とは底しれぬ反発心だった。華厳思想は〈全存在を全肯定する〉思想であるように思えたからだ。もちろん肯定する過程において理法界の働き、つまり理性（りしょう）＝空の働きによってすべての事象は無自性化＝「存在解体」（井筒俊彦）されるのだが、わたしが読書した１９７０年代はすべての存在、価値観を否定することが時代状況のなかで通奏低音として共有されていたし、既存の事象を否定・拒絶することによってのみ、あらたな知の地平を築けるのだという思考が支配的であったなか、華厳「四種（ししゅ）法界」における極致である〈事事無礙法界〉の楽天的な事象の肯定思考は容認できるものではなかった。

華厳の思想は、たとえば〈一即多・他即一〉〈非有即有・有即非有＝非存在即存在・存在即非存在〉などのように論理的に矛盾することを同居させる傾向をもっている。それは「菩薩は菩薩にあらずして菩薩なり」といった仏教の思考のなかで位置づけられるべきものなのだが、真逆の事態を併置して溶解させてしまう矛盾律のありようが、当時の「体制」思考に通じるものとして捉え、反発したのである。



東大寺のビルシャナ仏は釈迦の法身仏としての位置づけである

華厳―存在解体のあとの〈理〉のありかを問う

いま再び華厳に触れてみると、奈良・東大寺を本拠として、華厳思想の研究は学僧・律僧たちによって連綿と積み重ねられ、いまもその全容が解明されていない奥深さがあり、哲学としては魅力がある。ただし華厳を宗派としてみると、天台や鎌倉仏教諸派のように、民衆にかたりかけるコトバを持つことはなく、ひとびとの心を揺さぶる教理や実践行もほとんどなく、宗派の勢いは昔も今もない。そうした華厳のあり方に危機感を抱いた明恵は密教的な手法を導入することで時代にコミットしようとしていたのだった。

華厳の魅力は、華厳の弱点そのものであるといえよう。つまり華厳はあくまで菩薩の立場からの語られた経典であり思想であるため、いわば「仏目線」であるのだ。

一方、華厳の面白さは計り知れないものがある。この思想の広がりは、中国・朝鮮半島・日本ばかりではなく、インドネシアのボロブドゥールにも至っている。また西方では、紀元後三世紀には国際都市アレキサンドリアには仏教集団がいたとの説もあり、その都市に住んでいた新プラトン主義のプロティノスの思想と近似していることが中村元によって指摘されている。

いま私は、日本と朝鮮半島の華厳思想の受容の差異について関係書籍を読んでいる。朝鮮半島の仏教は、華厳をベースにしていることは多くの研究者によって指摘されている。先に引用した「四種（ししゅ）法界」について、日本華厳は〈事事無礙法界〉を法界の極致として定めているし、日本列島に積み重ねられた文化のありようも、この〈事事無礙法界〉を土着化、日常化している。朝鮮華厳の義湘によると〈事事無礙〉にいたった極致からさらに〈事＝個〉の中にある〈理〉にまなざしを向け、〈理〉の普遍性によって〈事＝個〉が相即円融するのだという還元作用を提唱しているのだ。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.147
神戸

2019年10月27日　通巻147号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)